

陳述書

土居立子
(砥部町在住)

「伊方原発3号機の稼働を許さないでください」

21年前の1999年、私は三重県津市から、愛媛県砥部町に転居してきました。夫が実家の農業を継ぐためです。

砥部に来て間もない頃、休日に家族4人で佐田岬までドライブに出かけました。その途中、四国電力の原発PR館、伊方ビシターズハウスを見学していると、伊方原発を中心にして円が書いてある地図が展示してありました。それを見て私は愕然としました。砥部町が50km圏内に入っていたのです。それまで私は夫の「原発から砥部は離れている」という言葉を、無理やり信じ込んでいたからです。

その頃は上の子ども2人が保育園に通っていました。放射能は特に、細胞分裂の盛んな子どもに影響を及ぼすということもあり、何かをせずにはいられない気持ちになりました。

子どもたちを、家族を守るために、何かしなければ、と思い悩んでいた時、「原発さよなら四国ネットワーク」の存在を知り、そこで素晴らしい仲間たちと出会い、市民運動に関わるようになりました。

前後しますが、私が三重にいた時のことを少しお話します。芦浜原発建設をめぐる、地元南島町（現在は南伊勢町）の漁師さんを中心に、激しい闘いが繰り広げられていました。津からはほど遠く、辺鄙な所だと聞いていたので、一度夫とドライブがてらに行ってみました。南島町は幹線道路に面しておらず、そこに行くにはぐねぐねの山道しかなく、まさに陸の孤島だと感じました。だからこそ開発されずに、豊かな海や山に囲まれた所でした。「多くの人の目に触れにくい、こういう所が原発に狙われるのか！」と実感しました。漁協の建物は、「原発絶対反対」と殴り書きされた看板で埋め尽くされ、何も知らない私にも、激しい闘いをしていることがわかりました。当時南島病院に勤めていたところが、「推進派の人が入院したら、親族よりも先に中部電力の社員がお見舞いを持って来る。」と言っていたのが、印象的でした。

2800人も南島町民が県都まで出てきて、県庁へデモ行進をしているところを、偶然車で通りかかったことがあります。私は仕事に行く途中で時間がなく、一言しか話すことしかできませんでしたが、そのデモ行進の光景は、今も目に焼き付いています。

私自身は反原発運動に関わっていたわけではありませんが、81万筆を集めた「三重県に原発いらない県民署名」に署名し、友人にも書いてもらいました。

そして砥部に来て1年もたない2000年2月22日、37年にも及び住民運動が、北川知事に芦浜原発の白紙撤回を表明させました。中部電力は芦浜原発の建設を断念したのです。

私が反原発運動に関わり始めた頃、1999年の9月30日、東海村でJCOが臨界事故を起こしました。衝撃を受けました。

そして原発のことを知れば知るほど、絶望的な気持ちになりました。

- ・南海トラフ地震が起きて、伊方原発が大事故を起こすのではないか。
- ・米軍ヘリや飛行機が原子炉の上に落ちて、伊方原発が大事故を起こすのではないか。
- ・そのような外的要因はなくても、機械にトラブルはつきもの。しかもミスを犯さない人間はいない。小さなトラブルやミスが大事故につながるのではないか。

そんなことを考えていると、伊方原発が大事故を起こす夢にうなされ、不安で眠れない夜が続きました。

しかし市民運動を続ける中で、私は少しずつ学んでいきました。

・原発の間近に住んでいる人は、いつ原発が事故を起こすかと、自分よりもっともっと緊張しながら日々暮らしてきたのだということ。

・原発は、被ばくしながら働く人たちがいなければ、成り立たないのだということ。

・原発は事故を起こさなくても、大量の放射能を、海へ空へと撒き散らしているのだということ。

・すさまじい量の温排水を海に流し、地球温暖化に大きく貢献しているということ。(稼働中伊方原発は、吉野川の単位時間あたりの流量にして2.22倍もの海水を取り入れ、7度も水温を上げて海に放流しています。)

・また、人が多く住む街中には、原発を絶対に造らない。交通の便が悪く不便で、人が少なく、貧しい場所を選び、金に物を言わせて原発を造るのだということ。

・原発は、地域住民を、作業員を差別した上にしか成り立たないものなのだということ。

憲法25条により、私たちは誰もが、安心して安全に暮らす権利を持っています。

憲法13条、14条により、私たちは誰もが差別されることなく、一人一人が尊重され、一人一人の尊厳が守られながら生きる権利を持っています。

しかしそのような、私たち誰もが持つ権利を、住民から、作業員から奪わなければ、原発は動かせないのです。

四電は甘い言葉で、詐欺まがいの手法で、金をばらまき、地域を分断し、自殺者まで出して伊方

原発を造りました。(甲1号証「原発の来た町」参照)

「絶対に1、2号機しか造らない」と言って始めた伊方原発に、現在3基も原発があるのです。しかもそこは、わが国最大の活断層である中央構造線のすぐ横、数百メートルしか離れていない場所です。

私は今年7月に、ヨットに乗せてもらい、伊方原発を海から観ました。

原発が建っている岩盤は、無数のひび割れや深い亀裂がありました。それはまさに、活断層の直近だということを物語っているのです。

2010年3月、伊方3号機は、他の原発よりも危険性の高い高燃焼度燃料を用いながら、更にMOX燃料を使うという、世界に類を見ないほどに危険性の高いプルサーマルを始めました。県民は、「我々をモルモットにする気か!？」と怒りの声を上げました。

そして2011年3月11日。地震と津波がきっかけで、福島第一原発は大人災事故を起こしました。私は「今まで自分たちは原発の危険性を訴え続けてきたけど、こんなにも早くそれが実際に起こってしまうなんて……。」という思いと、「何故こんな事故が起こるまで、原発を止めることができなかつたのか。」という後悔と自責の念でいっぱいになりました。

しかしその後、福島第一原発事故などなかったかのように、原発は次々と再稼働されてしまっています。

2016年8月11日、伊方原発3号機は再稼働しました。7月24日と8月11、12日には、再稼働NO!の意志表示をするため、全国から多くの市民がゲート前に集まりました。ところが愛媛県警は、他県から多くの警官を動員し、「警備」と称して集会の妨害をしにかかったのです。さらら館からゲート前に下る県道を一斉封鎖し、車両通行止めとしたため、多くの集会参加者は炎天下の中、2km余りの道のりを歩かなければなりませんでした。またゲート前は、道路をフェンスで狭く仕切り、道路の大半を、警備を行なう警官が占領していたため、集会参加者はフェンスで仕切られた狭い場所に押し込められてしまいました。参加者はゲート前でスピーチをしたり、歌を歌ったりといった、平和的な表現方法をとっているに過ぎないのに、です。原発を背に向け、集会参加者と対峙する警官を見て、私たちは「一体警察は、何かから何を守っているのだろうか。」「市民を守るべき警察が、何故私たちを排除して、一企業に過ぎない四電の原発を守るのか。」「しかも税金を使って」と感じました。

しかしながら今まで述べてきたように、住民の権利を奪い、違法なことをしなければ、造ることも動かすことができないのが原発なのです。事故当時18歳以下だった福島の子どもの小児甲状腺がんが、200人を超えているにも関わらず、福島県は「被曝との関連は認められない」と言い続

けていることから、それは言えます。

また四電は、「原発は安全である」「原発を動かさないと電気は足りない」「原発は二酸化炭素を出さないので地球温暖化対策になる」「原発は地域を活性化する」と、嘘を言い続けてきたのです。

愛媛を第二の福島にしたいくはない。しかし、愛媛が第二の福島になってしまうのではないかと、という恐怖の中で、私たちは日々暮らしています。

私の家は専業農家です。砥部の川井で細々と、代々農業を営んできました。少なくとも400年前から、この地に根を下ろしているそうです。農地が放射能に汚染されれば、生活の糧を一切奪われてしまいます。汚染された土地で、農業を続けることはできません。被ばくしながらの農作業などしたくはないし、そもそも収穫した農産物は、廃棄するしかありません。農業ができなくなれば、他所に行けとでもいうのでしょうか。なぜ私たちが避難しなければいけないのでしょうか。

私は安心してこの地に住み続けたい。そして子どもたちに、未来の人たちに、愛媛の美しい海や山、この美しい故郷を手渡したい。しかしその時に、原発も一緒に手渡したくはありません。半減期が何万年もする核のゴミを「あなたたちが守って行って！ よろしくね。」と言って手渡したくはないのです。

伊方原発1号機、2号機は廃炉にすることが決まっていますが、安心はできません。プールにある使用済み核燃料はどうなるのでしょうか。四電は3号機を稼働し続けるために、乾式貯蔵施設を造り始めています。それは永久に核のゴミが伊方に置かれることになるのではないのでしょうか。愛媛県は「六ヶ所の再処理工場が動き出せば、そこへ運び出す。」と言っていますが、再処理工場が動き出す目途は全く立っていません。そもそも、自分たちの所に核のゴミを置きたくないからと、他所に持って行ってもいいのでしょうか。

いくら国策とはいえ、処分の方法も決まっていない核のゴミを大量に生み出す原発を、稼働させる四電の罪は大きすぎます。

住民を40年にも渡って危険に曝し続けている四電。たとえ原発を稼働しなくても、原発がある限り、事故が起こす危険性はこれからも続いていきます。それなのに四電のキャッチフレーズは「しあわせのチカラになりたい」。どういう意味でしょうか？

とにかくこれ以上核のゴミを増やさないためにも、四電は3号機も即刻廃炉にするべきです。それが未来に対する責任です。

人々が安心して安全に暮らせるよう、
安心して安全に子育てができるよう、
安心して農業が続けられるよう、

未来の人たちに「安心してここに住み続けていいんだよ」と言えるようにするのが、公共事業者である四電が当然持つべき、倫理であり責任です。今すぐ3号機も廃炉にするべきです！

愛媛を第二の福島にしないためにも、裁判官の賢明な判断が必要です。3号機の稼働を許さないでください。

佐田岬の向こう、大分在住の池田年宏さんという人が作った「ふるさとは原発を許さない」という詩があります。それはまさに、私の気持ちを表現しているものなので、最後に紹介します。

「ふるさとは原発を許さない」

田んぼのあぜ道 丸木橋 川えび菜の花 水車小屋
夕焼け野いちご 寺の鐘
ふるさとは原発を許さない ふるさとは原発を許さない

「安全安心 気にするな すぐに死にはせぬ 大丈夫」
神話も嘘も 聞き飽きた
ふるさとは原発を許さない ふるさとは原発を許さない

被ばく労働 知らぬふり 子孫に残すは 核のゴミ
たとえ街の灯 消ゆるとも
ふるさとは原発を許さない ふるさとは原発を許さない

偽り箱物 あぶく銭 死の灰セシウム 温排水
いくら小金を 積まれても
ふるさとは原発を許さない ふるさとは原発を許さない

二度と戻せぬ ものがあゝる 取返しのつかぬ ことがあゝる
お前の愛した ふるさとは
ふるさとは原発を許さない ふるさとは原発を許さない